

喜びであった。時十一月十七日、船は一路祖国日本舞鶴港へと進む。

広大な日本海水平線を遙かに望む甲板を強く踏みしめ、生還の無事をどことなく手を合わす。十一月二十日、長かった望郷三年三か月、いよいよ祖国がかすかに見え始めた。懐かしい日本だ、島が見えるという声が響くのだった。

栄豊丸は山合いをくねるように舞鶴湾へ引き寄せられて行く。兩岸山々に秋深く秋独特の色彩に染められている。まさに日本国だけに見られる景色であろう。シベリアでは四季の区別はなく、夏冬だけを動物が知るのみである。景色といってもぱっとしなかったようだ。

さあ、上陸だ。歓喜と安堵と万感こもものの中に、自分だけがこれだよいかと急転する。

それはイマンの地で、日夜生死ともに交わった朋友や犠牲者に対してご冥福を祈らずにはおられなかった……合掌する。

なお、残留となった星君に対してはすまぬ毎日だっ

たが、幸いに星君は二十四年の暮れに無事帰還された。ふるさとでの再会、幾度となく感激の握手、相互喜び合った。

シベリア抑留労苦調査

京都府 久保田 清蔵

昭和二十五年四月召集令書受ける。京都師団歩兵九連隊へ入隊。(甲種合格第二国民兵役で初年兵三十七歳で入隊)。四月二十日京都より移動(北朝鮮平壤歩兵二四二部隊編入) 毎日猛訓練が続く。

ソ連軍参戦満州へ襲来。二十年八月十五日終戦。鮮内召集兵は即時解除。帰宅す。隊長命令により兵隊は早く帰国できるから、自由行動をとるなと禁じられる。八月十八日まで鉄道は一日数本南朝鮮へ運行していた。自分たちも脱走して汽車に乗れば早く帰国できた。当時はそんなことは考えられなかった。八月二十日中に三合里(平壤部隊の演習場)に集合命令。軍服衣類

(皆新品) 食糧(米、缶詰、乾パン、砂糖、塩、ようかん) 持てるだけ多く持参せよとのこと。兵営内の武器食糧などを戦略物資として全部ソ連軍が徴発するから。三十八度線が閉止(八月二十日)のため満州(東北、及び北朝鮮)より汽車で南下の人々は平壤駅で下車させられ三合里の収容所へ抑留される。広大な丘陵も毎日数百人の一般人で満員になり、テント生活でにぎわう。初め携行食を食べていたが、だんだん少なくな、配給なく心細くなる。自分の部隊は九月末に東京ダモイ(帰国)。平壤駅より貨車で出発、北朝鮮興南着。元日本窒素会社の社宅に入る。ここで船の来るのを待ち、帰国するとソ連兵が言う。この間、毎日駅へ行き戦略物資をソ連領へ輸送、貨車に積み込み作業をする重労働で、病弱な人は衰弱して苦痛のようだ。ここへ来て食糧の配給は少ないが、毎日ある。

二十一年一月三日、入船したから東京ダモイだ。皆喜んで乗船。三日後の朝ナホトカに入港。驚いた。海は厚く氷結しており、向こうの丘に小さく人影が動いている。よく見ると日本兵だ。三々五々集まって何か

作業をしている。ダモイどこから自分たちもここで労働させられると思う。午後下船、町中を行進。どこともなく日本兵が現われて通っていく。話をする事ができない、歩哨が付いているから。夕方駅に着き貨車に乗るが、寒くて凍るようだ。貨車の板を破ってたき火をする。生米を cand 空腹をしのぐ。朝方貨車は出発、停まっては行き、行つては停まる。着いたところは石炭鉱だった。ここで野宿する。苦勞の始まり。

ここは露天掘りの炭鉱で、日本兵が大勢いた。歩哨は日本兵と話をさせない。自分たちもこのように悲惨な重労働をするような気がする。いつ帰国か、心細い。翌朝零下二十度のこの町で悲惨なものを見た。日本兵の冷凍になった遺体四十五体ほどそりに積んでどこかへ埋葬するのか通つて行つた。悲惨な光景を見て心細く思う。この日、丸一日かかりで雪の荒野を、また森林を行進。小休止のとき寝るなど注意を受ける。寝ると凍死するから。夕方重い足を引つ張つてスーチャン地区第十一収容所に着く。ここでもまた悲惨な光景を見る。やせて骨と皮、足も細く幽霊が歩くようだ。去

年の秋に元山航空隊から来たとのこと。終戦間もなく食糧も少ないため先着の部隊は悲惨だった。この日からこの収容生活が始まる。翌朝夜が明けぬ暗い中起床（午前六時前）、朝食（薄い雑炊と黒パン少々）、食糧が少ないので労働ができぬ。つらいのは朝の作業に行くとき、兵哨が人員の点呼で二列に並んで、時間がたつて一番の苦痛。酷寒時手足がしびれて痛い。今日の作業は鉄道建設に行く。地面が冷えて堅いからなかなか掘れない。作業終わる前に森林で生木を切ってきて、明日掘るところをたき火で暖めて帰る。（生木でも油をかければよく燃える）この収容所に来てから京都及び平壤の同年兵ども、別々の仕事につく。食糧が少なく栄養失調者が増す。余病が出て医務室のベット十床ほどいつも満床。重症者はトラックの便があれば町の病院へ転送。だれかが死亡したとの話を聞く。この収容所でも下痢患者が出て、三人余死亡する。医務室にはよい葉がなく、病気になったら治らない。私も一度雑役三人で、何県のだれともわからぬ人、肉親の夢を見て無念の思いで死亡した人を穴を掘り埋葬した。鉄

道建設の仕事を三か月ほどする。

暖かくなるころ、二十余人農耕隊として収容所全員の食糧自給自足のため、農作業に行く。歩哨とも顔なじみになり、今までのように口やかましく、ダバイ、ダバイと言わなくなった。初めての農作業で苦勞する。大陸の夏は、太陽の光線が強く気温が高く、作業も長続きができず、木影での休憩が多い。農作業の合い間に後続の部隊のため三十余人の宿泊所を新築する。日本の山小屋のように丸太を組み上げ二十日間で作上上がり。ソ連の将校より喜ばれた。収穫前の八月末、先の収容所に帰る。私たち留守中に収容所内に日本式の立派な浴場ができて驚いた。今まで月二回ほどソ連式の（小屋の中へ石を積み上げ熱く焼いて水をかけ小屋中蒸し暑くする。）蒸し風呂に入っているから、これから週一回入れるとのこと、健康もよくなり喜ばしい。九月初めに伐採の作業に変わる。九月になると朝晩冷え込む。道路も凍りつく。二度目の冬の時節に入る。二人一組になって二人用の大きい鋸で大木（四人ほどで抱える）を二人で切る。（一日のノルマ二本以上）

切ると黒バンの持配が当たる。十月初めには雪が降る。ここの雪は小さくサラサラして解けない。毎日降るから低地で雪だまりになり、風が吹くと雪が暴風雨のように舞い上がり、五十メートル先視界は見えない。このようによく暴れる降雪後の作業はつらい。腰までつかって仕事をする。木を切って倒すとき、倒す方面の人員に待避を伝える、大木が倒れるときは周囲の木の枝をはねて危険だ。

十二月初めごろ、伐採の作業から材木のトラック積み込み作業に変わる。この仕事は危険だ。トラックの片側、前方と後方に丸太をかけ数人で回しながら押し上げる。材木の置き場が林道の近くだといいが遠いと骨が折れる。この仕事のノルマ午前一回午後一回の積み込み。日に二、三回のときもあり、最高にノルマを上げる。所長はいつも我が班を賞していた。班長は鼻高だった。正月近くになり正月休みが話題になる。食糧も大分よくなり、栄養失調患者もよくなって病院より帰ってくる。酒、甘いもの、自分の好物を話し合っ

て毎日にぎやかに元氣よく働いている我が班は、相変

わらず積み込み作業でノルマを上げている。二十二年四月末日に何の通知もなく作業が休みになる。我が班だけで気味が悪くなる。

暖かくなり、収容所内を毎日掃除する。帰国のニュースが伝わってくる。ほかの収容所が、また病院船が帰ったと話に花が咲く。十日前に我が班全員荷物を持って集合、やはり帰国だ。信じられない気持ちだ。整列していると京都召集以来の友人中野君だ。これからウラジオストクへ作業に行くとのこと。先に帰国するため、中野君の伝言を家へ伝えるを約す。トラックが物資を降ろした後乗車する。来るときはこの山奥の収容所へ歩いてきたが、今このように車で送ってもらうとは感無量だ。

夕方ナホトカの町に着く。翌日、町中を見回す。二年前より大分変わっていた。前は惨々たる漁港だったが今は見違えるように立派で整備された港。大きい倉庫が何棟も建っている。桟橋も立派なコンクリート製。大きい汽船が何隻も入港していた。初めて来たとき見た向こうの丘の上には家がたくさん建っていた。この

ところにて本当に帰国できるのかと危惧を生ずる。日本人でありながらソ連軍の手先のようになり、我々の何を調べるのか、荷物から言動の検査から、何の理由かわからずこの調査が通らず、ここより返され帰国できない人もいた。ソ連軍の教育を受けた人物が、ソ連軍の事務をしていた。明日乗船出来る由、今晚はよい夢を見たい。さあ、帰国乗船。

ハバロフスクの思い出

大阪府 総元 緑朗

強制抑留最初の年はチタ州カルイムスカヤ駅といつても民家もなく、駅のホームさえない線路上に下車させられ、吹雪の降る山道を約十五キロ登ったシラカバの密林で伐採とそり運搬に従事して、多くの同士を極寒と飢えの闘いで亡くしたのだが、二年目の春、ダモイ、ダモイと列車はハバロフスク駅に着いた。さすがに街である。私はこの街で転々と変わったラーゲルに

収容させられた。一夜明けると原野を港灣労働者を満載したトラックがもうもうたる砂塵を巻き上げながら、工場の方へばく進する。歩いている労働者は、手を上げさえすれば車は急停車して快く便乗させる。さすがは共産国だと思った。乗用車は全く見られない。女たちも平気で畑のキュウリ、トマトの野菜をもぎ取ってはほおばりながら同じ方向に歩いている。後ろからトラックが来れば、やはり手を上げて便乗して行く。何か活気あふれた別社会を見るような気がした。

よさそうな中年男が待っていて「おれはこの小屋の責任者だ。お前たち三人で小屋の中にあるれんがを積み上げ、まずパン焼き窯をつくってくれ」と、その設計図を見せてくれた。なるほど三人でパン工場をつくれというのか。ヨシよい仕事にありつけたと考え、気合いをかけて五日間でこの窯を仕上げてやった。男はよほど気をよくしたらしくて、我々の隊長に面会を求め、続いて三人をパン製造工にさせたい旨申し出た。隊長即刻承諾したらしく、三人は当分の間、パン工場に出向勤務することになった。